パリにおける「住み込み乳母」(1865-1914)

松田祐子

≪ キーワード ≫

「住み込み乳母」、パリ、1865-1914、ブルジョワジー、
乳母の子ども、人口減少、母親

≪ 要　旨 ≫

19世紀後半、フランスでは乳母制度が発展し「乳母産業」と称されるほどであった。なかでもパリのブルジョワ女性たちは、社交生活のために、自ら母乳を与えることはせず、自宅に住み込ませた乳母に子育てを委託していた。このような乳母は「住み込み乳母」と呼ばれ、19世紀最後の10年間に急激に増加した。

「住み込み乳母」はブルジョワジーの階層誇示の象徴としての役目を担わされ、人目につく仰々しい衣装を着て、毎日公園や街頭に現れた。すなわち「住み込み乳母」の増加は、労働者層との差異化を計ろうとするブルジョワたちの見栄の産物であり、社会改良家やモラリストの非難の的となった。

彼らは、「住み込み乳母」の利用は乳母の子どもたちを母親から引き離し、悲惨な状況に追いやることになっていることを暴き出し、この「住み込み乳母」の子どもの問題を乳児死亡率の高さに結びつける。すなわち「住み込み乳母」が、当時のフランスの特徴と考えられた、人口減少、兵士要員の不足、さらには国家の危機の元凶であるとされたのである。

しかし20世紀に入ると、あまりにも普及しすぎた「住み込み乳母」は、ブルジョワジーの階層誇示の象徴としての役割を失い、その典型的な衣装は消滅する。批判を受け「住み込み乳母」の弊害に気づかされたブルジョワ女性たちは、乳母の子どもの問題を解決するため、保育施設への援助を行った。また殺菌技術の発達により危険性の薄らいできた哺乳瓶を利用する召使の女性を雇うようになっていく。「住み込み乳母」に変わってブルジョワジーの象徴として現れてくるのが、自ら母乳を与え子育てをする母親像である。ただ、現実には赤ん坊の世話をする召使の女性はまだ必要であり、彼女たちは乳母、あるいは子守と言う呼び名で存続しつづけた。

はじめに

子育ての方法は地域、時代により様々である。例えば、19世紀後半から20世紀初頭にかけてのフランスでは、乳母に子育てを委託することが多かった。特にパリにおいて、乳母は「乳母産業」と称されるほど広く普及していた。乳母の利用方法は社会階層によって異なっており、豊かなブルジョワ家族では、自宅に乳母を住まわせ、乳母の紹介はコネで行われていた。これらの乳母たちは「住み込み乳母 (nourrice sur lieu)」と呼ばれている。一方、乳母の家に乳児を持ち帰って育てる乳母は「持ち帰り乳母 (nourrice à emporter)」である。「持ち帰り乳母」を利用する場合でも、比較的豊かな家族であれば、子どもは家族がたびたび訪れることのできるパリ郊外の乳母の家に預けられ、紹介はコネによることが多かった。労働者、召使、職人の家族では、紹介は斡旋所を通して行われ、子どもは首都から離れた、移動、監視、訪問の困難な地域に預けられた。赤貧家族や婚外子、捨て子の場合は僻地の最も

貧しい乳母のもとに送られ、動物の乳や穀物の汁で育てられた［Rollet 1990 76-79］。本稿でとりあげるのは、ブルジョワ層が利用していた「住み込み乳母」である。「住み込み乳母」の利用は、乳がでないため、あるいは生活のために子どもを預けて働かざるを得ないので授乳できないため、やむをえず他の女性に授乳を委託するといった生物学的、経済的理由からは説明のつかない行為である。また「住み込み乳母」というシステムは、乳母の子どもたちを母親から引き離し、多くの場合、悲惨な状況に追いやることになるという問題をひきおこした。ブルジョワ女性たちは、なぜ「住み込み乳母」を利用したのだろうか。

フランスにおける「乳母産業」については、すでにいくつかの研究がある。「乳母産業」がフランスに特徴的な現象であったこと、19世紀に発展し第一次世界大戦後消滅したこと、乳母の子どもをないがしろにするような形態で行われていたこと等が言われており、その発展と消滅の原因についても考察がなされている。例えばジョージ・サスマンは、社会・経済的条件の変化にあるとする。すなわち19世紀には、女性の雇用が増加し、子どもを預けて働くようになったが、第一次大戦後、女性は家庭に入ったので乳母も減少したとする［Sussman 1980&1982］。しかしサスマンは、「住み込み乳母」については論じていない。また、アンヌ・マルタン=フュジェは、フランス人は母親による母乳授乳を理想としていたが、現実には不可能であったので、乳母による授乳を理想に準拠するものとして利用したのであるとする。すなわち乳母による授乳のほうが、哺乳瓶より自然であるようにみえたからであるとする［Martin-Fugier 1978 13］。ファニー・ファイ=サロワは、売乳は貧困の産物であり、貧しい地域からの乳母の供給と乳母を雇いたいブルジョワ側の需要の増加が「住み込み乳母」を発展させたとする［Faÿ-Sallois 1996］。また、カトリーヌ・ロレは、「住み込み乳母」がラテン系社会の特徴であり、アングロ=サクソンの国にはなかったとし、その理由は文化的要因にあるとしている。すなわちフランスは、イギリスに比べて「教育者としての母親」、「生産活動を行わない母親」モデルを選択するのが遅く、乳幼児期の教育が二次的で無視できる仕事とみなされていたからであるとしている［Rollet 1990 513-514］。

本稿ではこれらの研究にそって「乳母産業」を概観した上で、19世紀後半から20世紀初頭にパリのブルジョワ女性が利用した「住み込み乳母」に焦点をあて、その発展と消滅のメカニズムを、ブルジョワ女性の心性をとおして検討する。ブルジョワ女性たちの意識については、主として婦人雑誌『フェミナ』［*Femina* 1901-1914］の記事をもとに考察する。『フェミナ』は1901年2月創刊の代表的な女性誌のひとつであり、購読者層としては、中・上層のブルジョワ女性が想定されている。これは金融資本家、産業資本家、高級官僚などの大ブルジョワと、小商店主、零細企業経営者などの小ブルジョワの中間に位置し、生活様式、服装などによって民衆階級とは一線を画する中間階級、すなわち中間管理職、技術者、公務員、教員などの妻がモデルとしてめざす女性たちである。「創刊の言葉」に書かれた雑誌のコンセプトは、「真の女性、エレガント、上品、優雅という最上の伝統の中で健全に育てられたフランス女性のためのもの」である［*Femina* 1 fev. 1901］。雑誌の評価としては、その時代のブルジョワ女性イメージを最もよく提供しているといわれている［Delporte 1998 110］。

第1節　19世紀後半のパリにおける「乳母産業」

上流階層の母親が自ら授乳せず乳母を雇う習慣は、古代から様々な地域で存在している。肉体労働をしないことが上流階層の証であるとすれば、上層の婦人たちが自らの身体を消耗させる授乳という一種の労働を行わないことは、当然であったのだろう。しかし19世紀後半のフランスにおいては、上層でない人々までもが乳母を利用するようになっていた。当時のモラリストや社会の指導者たちは、この現象をフランス特有のものであるとする。例えば1877年出版の『新医学外科学辞典』には、「フランスは、乳母産業が固有の法令にしたがい、君主が発行する政令の対象となっている、ヨーロッパにおける唯一の国である」とある。また1879年の『医科学百科事典』は「フランスは乳母産業が組織されているほとんど唯一の国である。イギリスには金銭で雇われる乳母は存在しない。したがって乳母斡旋所も法令もない。乳がでない母親は、普通は哺乳瓶を選び、乳母がどうしても必要な場合は、フランスから来させる」と述べている［Faÿ-Sallois 1996 72］。「イギリスには金銭で雇われる乳母が存在しない」というのは誇張であるとしても、乳母制度が産業と称されるまでに発展し、盛んに行われていたという状況は、フランスの特徴であるのは間違いないことで

あろう。

パリにおける乳母制度の歴史は古く、すでに1350年に乳母斡旋所経営者(recommandeures)に対する乳母の管理を規定した王令が発せられている。また、1611年には、乳母手配師(meneuse)の存在に言及した判決がある。17世紀、18世紀には、乳母と乳児に関する情報の管理が行われ、乳母と乳児の親に対する義務と罰則が規定、更新されている。19世紀前半には、人口調査、統計学の発達により、乳母に預けられた乳児の死亡率の恐ろしいまでの高さが明らかになり、乳母と乳児の送迎がひどい状態で行われていることが告発され、乳母と乳母手配師の資格および条件を規定した警察命令がだされている。しかし乳母の濫用は増加しつづける［*Larousse* 1866 article《NOURRICE》］。ついに1874年に、ルセル法「乳母になるには乳母の子どもが7ヶ月以上になっているか、または他の女性による乳房からの授乳が保証されなければならない。乳母は市町村長が発行する証明書を携帯しなければならないetc.」が規定されるに至った。

19世紀後半のパリに、何人の乳母がいたかは正確にはわからないが、乳母斡旋所の紹介で預けられる乳児の数から推察することはできる。1885年の「子どもの保護に関する報告」では、乳母に預けられているのはセーヌ県全体で乳児の1/5、パリの中心部ではその倍となっている［Faÿ-Sallois 1996 61］。1891年のルデ医師の調査報告には「1885年には死産を除いた60,098人の出生のうち、15,309人が乳母に預けられている。つまり約25.47%である」と書かれている［Ledé 1891 6］。カトリーヌ・ロレは1898年から1914年までの時期に、セーヌ県では毎年、乳児の1/3が預けられていたとする［Rollet 1990 500］。

乳母斡旋所に登録された乳母全体の数は1882年をピークに減少していくが、「住み込み乳母」の数は、19世紀最後の10年間に増加している［Faÿ-Sallois 1996 90-92］。ルデ医師の調査によれば、パリ市で1885年に乳母斡旋所をとおして「住み込み乳母」になったのは3,239人である［Ledé 1891 3］。セーヌ県警察の統計では1891年に5,760人が数えられている［Rollet 1990 514］。これらの統計には、コネで雇われ、届け出がされていない乳母の数は含まれないので、実際の数はさらに多かったと考えられる。すなわち「住み込み乳母」は19世紀後半から増加し、1900年頃には、公園や通りに「住み込み乳母」がいる風景が普通のことになるほど多くなっていた［Pange 1962 47-48］。

1873年から20年間のブルジョワ家族の家計を調べたマルグリット・ペローは、小さな子どものいるパリのブルジョワ家族では、質素な家庭であっても「住み込み乳母」を雇っていたとし、一例として年収10,000～15,000金フランのあまり裕福でない、6人の子どものいるブルジョワ家族の家計を紹介している。その家では、結婚から2年間、大人2人と子ども1人の世話をする召使の給金の、支出に対する割合は4.5%であったが、子どもの人数が増えるにつれ、召使の給金が支出の10%を超えるまでになった。しかし、最後の子どもが3歳をすぎ、乳母が必要なくなると、世話を必要とされる人数が8人のままであるのにもかかわらず、5%に減っている。しかもこの家族の収支は、20年間常に赤字であった［Perrot 1961 78］。このことは、「住み込み乳母」の習慣が家計を圧迫するものであったにもかかわらず、中・小ブルジョワ層にまで広まっていたことを示している。

第2節 「住み込み乳母」繁栄の理由

上記のような「住み込み乳母」の増加を背景として、19世紀末には、家庭医や家政専門家による「住み込み乳母」の選択と扱い方のマニュアル本が多数書かれている。母親に向けた育児書の体裁がとられたこれらの本は、表面上は母親による授乳を奨励している。例えば「授乳は妊娠の仕上げである。母親は授乳を絶対的な義務というより、むしろ貴重な特権であるとみなさなければならない」［Millet-Robinet et Allix 1884 117］、「女性の乳が最上である。また、母親の乳が乳母の乳よりもすぐれている。したがって可能ならば、母親が自分の子どもに授乳しなければならない」［Perier 1886 97］のように述べられている。しかしその同じ著者が、社交界の女性には授乳できない理由があると論理を転換していく。第1は医学的な理由である。すなわち授乳にふさわしくない疾患―身体だけでなく、心のトラブルも―がある場合、乳の分泌が減り、質が変化する、さらには自発的意思のない授乳はよくないとする。第2に社交と両立不可能という理由である。社交界の女性が授乳するには大きな犠牲が必要であるうえに、彼女たちの着用しているコルセットは乳房を損なうので授乳はできないとする。また授乳中の性交渉は乳に悪影響を与えるとして禁止されたため、妻の授乳は夫の敵意を生むことになり、したがって乳母が必

要であるとする。その結果、「母親が授乳をしたくない、またはできないとき、あきらめざるを得ないとき、乳母を雇わなければならない」「普通は乳を与える能力は、母親よりも乳母のほうがすぐれている。特に母親が社交界の女性で、デリケートな健康状態であり、時間を子どもと家の管理に振り分けている場合には」［Perier 1886 124, 130］と乳母を雇うことを正当化し、さらに「母親の監督と指導下にある雇用者からの授乳は、母親の乳房に代わる最上の方法です」［Millet-Robinet et Allix 1884 143-144］と「住み込み乳母」を雇うことを勧めている。

結局これらの本は「住み込み乳母」雇い方マニュアル本に変化し、乳母の選択基準、待遇、また乳母に対する母親の心得などが書かれることになる。例えば乳母の出身地、既婚か未婚か、年齢、授乳の経験の有無、出産後の日数、乳母の両親、乳母自身、乳母の子どもの健康状態、乳房の質、乳母の外見、性格などの考慮されるべきことが書かれている。また家庭医による一般的な診察、乳の検査、乳母の子どもの診察、乳母への問診が行われることが勧められている。「住み込み乳母」の給料は50～80金フランとされ、他の召使に比べて優遇されており、特にパリでは、100金フランになるほど特権的に高かった。また給料以外に、乳児の歯が生えだしたとき、はじめて歩いたとき、病気が治ったときなどの様々な機会に賞与が与えられることとされた。食事は乳の量や質に影響を与えるとして、豪華なものが与えられたが、一方では、質素な食物に慣れた田舎から来た乳母に突然滋養のあるものを与えすぎるのはよくないともされた。乳母の部屋は、母親の部屋に近く、広く、換気がよく、暖かい南向きの部屋が必要とされた。さらに母親に対しては、乳母の指導、監視が義務づけられた［Millet-Robinet et Allix 1884 145-152; Perier 1886 125］。

このようなマニュアル本からは、「住み込み乳母」を雇えるのは裕福な家族、他の仕事をする必要のない、監督時間のある女性であるようにみえる。それにもかかわらず、実際には裕福でない中・小ブルジョワ層にまで「住み込み乳母」の習慣が浸透していたのである。ブルジョワジーたちは、なぜ無理をしてまで「住み込み乳母」を雇っていたのだろうか。

1893年、国立人口問題協会において報告を行ったレオン医師は、「住み込み乳母」を雇うに至るブルジョワ家庭の様子を次のように描いている。「若い所帯では、乳母選択の問題は軋轢を引き起こさずにはおかない。(中略)すでに数ヶ月前から彼女は訪問をあきらめなければならなかった。もしさらに一年間、社交界から遠ざかっていなければならないならば、すべての人間関係を失ってしまうことになるだろう。(中略) その上ある記憶が彼女につきまとっていた。婚約の夜会のとき、授乳中のある若い女性は、隣の部屋に自分の子どもを連れてこなければならなかった。彼女はワルツの合間に赤ん坊に胸を与えていた。仲間の娘たちはこの出来事を大笑いしていた。舞踏会の化粧室でコルセットのホックをはずさなければならなかったこの女性のことが、全く滑稽で理解できないように思えたのだ。そのようなとき、彼女の母親が介入してきて言う。『でも婿殿、私のかわいそうな娘がやっと立っているのがわからないのですか？　あなたはこの娘を疲れ果てさせたくはないでしょう。私のかわいい孫は、良い乳母に世話されるほうが何千倍も良いことをよくお考えください。私が自分で乳母を選び、監督いたしましょう。その間にあなたとあなたの妻は、このところあまりにもなおざりにしていたつき合いを再開してください』」［Petit 1893 6］。結局、授乳よりも社交が選択されることになるのである。

しかしながら「持ち帰り乳母」にわが子を託すことは、その死亡率からみてリスクが大きい上に、母親による乳母の監視ができない。マニュアル本には「母親はどうしても不可能なときしか子どもを自分から離すことに同意してはなりません」［Millet-Robinet et Allix 1884 143］と書かれているのである。また哺乳瓶の利用については、これは最後の手段に位置づけられている。なぜならば、乳児に動物の乳を飲ませることは消化不良などの弊害があるうえに、パリで動物を飼うのは不可能である。ましてや殺菌の不確かな哺乳瓶の使用は「嬰児殺しの赦罪」［Perier 1886 140］とまで言われている。サスマンの言うように、殺菌技術は1890年代半ばに開発されているのではあるが［Sussmam 1980 228］、ブルジョワ家族に普及するのは第一次大戦前である。おそらくフランスでは、科学的な理由以上に哺乳瓶への嫌悪感が大きかったのだろう。アルフォンス・ドーデの『ナバブ』に描かれたベトレエム愛育園では、「赤ん坊たちはヤギの乳を吸うくらいならば死んでいくほうを選んだ」とさえ書かれている［Daudet 1930 209］。

以上のように、社交の重要性、「持ち帰り乳母」と

哺乳瓶授乳の危険性が「住み込み乳母」を利用する表向きの理由である。しかし19世紀末のパリに「住み込み乳母」が急増したのには、これらの理由だけでは説明のつかない、時代と地域に特有の社会的要因があるようにみえる。そこで次は「住み込み乳母」の外観に注目する。

19世紀の前半まで、「住み込み乳母」たちは出身地であるノルマンディーやコーなどの民族衣装を着ていたが［Achard 1840 37］、19世紀末には次のような典型的な衣装が全盛となる。すなわち大きなひだ飾りで縁取られた縁なし帽、大きな金色のピンで帽子に留められ、赤、青、緑、さくらんぼ色、あるいはタータンチェックといった目立つ色をした地面にまで届く幅広の長いリボン、大きなポケットのついたクラシックなエプロン、それを覆う、ビロードの飾り紐で縁取られ、上質のラシャでできた、ゆったりとしたケープである［Pange 1962 47-48］。

このような「住み込み乳母」の衣装は、それなりに乳母の仕事にふさわしいものであったのも確かである。1912年3月15日付の婦人雑誌『フェミナ』は、この衣装を「クラッシックなコスチューム」として挙げ、この衣装が消滅しつつあることを、「残念なことです。あれは便利で楽しいものでした―全身を包む大きなマントは風の冷たさから子どもを守ることができました。たっぷりした鮮やかなリボンで囲まれた小さな白い縁なし帽が特徴でした」と懐かしんでいる［*Femina* 15 mars 1912］。

とはいえ19世紀後半のブルジョワジーは、衣服に対して、機能的な役割よりも記号としての役割をはるかに重視していた［Perot 1981 17］。彼らは、優雅な生活をしているようにみせること、つまり自分がブルジョワ階級に属していることを示すことに最も心をくばっていたので、たとえ家計が赤字になっても、定期的に客を迎える日をもうけること、そのために部屋を豪華にすること、衣服等の外観には金を使っていた［松田 2003 68-70］。とりわけ現実には労働者階級と隔たりの少ない小ブルジョワ層にとっては、これらの記号あるいは象徴によって労働者との差を示すことが不可欠であった［Perrot 1981 17］。召使はこのようなブルジョワジーの外観を構成する重要なアイテムのひとつであり、どこの召使がどのような衣装を着ているかは、彼らの大きな関心の的であった。なかでも乳児を散歩させるために毎日公共の場に現れる「住み込み乳母」の衣装は特に重要であった。その結果、パリの「住み込み乳母」の姿は、多くの写真、絵、言説に残されるほど、人目につく仰々しいものとなった。1913年に出版された『実践育児学』には「フランスでは、大きなリボンで飾られた縁なし帽をかぶった乳母は、富裕な家族の中の装飾的な部分を形成する」［Rollet 1990 512］と書かれている。このように、独特の衣装を着た「住み込み乳母」はブルジョワ家族の装飾品のひとつであり、裕福で立派な家族であることを示す標識となっていたのである。

ところが「住み込み乳母」の急増は、逆説的に、この標識がもはや社会的階級の差異化の役割を果たさなくなってしまうことを意味した。その結果、低い階層のブルジョワジーが「住み込み乳母」を雇い、上記のような衣装を着せることに悪い印象を持つ人々がでてくるのである。階層秩序を守ろうとする古くからのブルジョワジーの苦々しい思いであろうか。「グロテスク」［Pange 1962 47-48］、「非実用的でおかしな身なり」［*Femina* 1 janv. 1913］といった表現での批判は、中・小ブルジョワジーの見せびらかしに対する非難である。

第3節　「住み込み乳母」への批判

早い段階で「住み込み乳母」を批判したのは、社会改良家、モラリスト、調査医たちである。大革命からナポレオン戦争を経て、フランスは親となりうる青年たちを多数失った。また19世紀はじめから開始された人口統計調査は、近隣諸国に比較してフランスの出生率の低さを示していた。人々は実際以上にフランスの人口が減少しているのではないかという印象をもち、危惧を抱いていた。とりわけ普仏戦争後は、人口問題が兵役につくことのできる人数の足りないことと結びつき、国力弱体化の原因とされた。フランスにおける人口減少について論じた書物は、1870年から1914年の間に250冊以上も出版されている。なかでも人口減少の大きな原因とされた乳幼児死亡率が、立法議会、医学アカデミー、公共福祉施設、子供保護協会、科学雑誌の論争の的になっていた［Cova 1997 29-35］。1866年のモノ医師の報告によれば、ニエーヴル県にある彼自身の出身郡の乳母に預けられた「パリの子ども」の死亡率は7割以上に達しており、平均乳児死亡率17.9%に比べて極端に高かった［Faÿ-Sallois 1996 67］。これらの数字に衝撃をうけた社会の指導者たち

は、「乳母産業」がフランスの国力弱体化の元凶であるかのごとく警告を発している。例えば『19世紀ラルース大百科事典』には次のように書かれている。「今日行われている乳母産業は、伝染病の何千倍も恐ろしい最も死に至ることの多い永続的な禍である。伝染病は一過性のものでしかない。しかし警告が発せられ、ぞっとするほど高い数値が明らかになった乳児死亡率に直面して、(中略)『祖国は危機に陥っている』と言っても誇張ではない。(中略) 全ての悪は、授乳に対する女たちの反抗からきている。義務を回復させる方法を見つけよう。『婦人』ではなく『女性市民』になろう。そうすれば、もう祖国が危機に陥っていると警告する必要はなくなるだろう」[*Larousse* 1866 article《MORTALITÉ》]。

さらに1892年11月には、国立人民会議協会において、レオン・プチ医師が「住みこみ乳母の話」と題して報告を行っている。彼は、自らジャーナリスト、仲介人、そして時には客になりすまして乳母斡旋所に入っていき、乳母たちの話を聞き、実態を調査したとする。それによると、乳母とその子どもは手配師に連れられてパリに到着する。乳母の就職が決まると、乳母の子どもは最悪の環境の中を小包のように田舎に戻される。乳母を管理し、乳児を保護する法律が存在するにもかかわらず機能していない。乳母は出身地や子どもの月齢を巧みに偽っており、ブルジョワ社会は簡単にだまされる。乳母の子どもは悲惨さを演出する小道具として、毎夜職業乞食に賃貸されている。乳母になった田舎の純朴な娘は都会の贅沢な生活におぼれていく。このようにプチ医師は、荒廃する村、死んでいく乳児たちのことを描き、その上で、「住み込み乳母」制度の裏には深刻な社会の不公平が存在することを告発する。またそれがフランスの人口減少の原因であり、近隣諸国に比較して兵士の数が足らない状況になっているのはそのためであるとする。最後に、「奥様方、子どもたちの未来は母親が作り出すものです。子どもたちの未来は脅かされています。行動するのはあなたたちです。人類の救済活動に加わりましょう！」と締めくくっている[Petit 1893 1-6]。

ところで衝撃的なまでに高い死亡率であったのは、「持ち帰り乳母」に預けられた子どもたちであり、「住み込み乳母」が世話をしている子どもたちではない。ブルジョワ層が「住み込み乳母」を雇うことは、乳母の子どもを死に追いやることになる点で問題であるとはいえ、ブルジョワの子どもと乳児の高い死亡率とは直接関係がない。また「持ち帰り乳母」に乳児を預けているのは、商人、職人、事務員、労働者、召使など様々な家族であり「住み込み乳母」ばかりではない。それにもかかわらず、「『婦人』ではなく『女性市民』になろう」「奥様方、行動するのはあなたたちです」という呼びかけは、明らかに「住み込み乳母」を利用しているブルジョワ層の母親にむけられた言葉である。アンヌ・マルタン=フュジェが指摘しているように、真の社交界夫人は「住み込み乳母」を雇ったのだから、エレガントなパリジェンヌの子どもが田舎の貧しい乳母に預けられ衰弱しているという『19世紀ラルース大百科事典』の説明は真実ではない[Martin-Fugier 1978 15]。社会改良家やモラリストは、一見論理的なように見せかけて、実は「持ち帰り乳母」と「住み込み乳母」を混同し、論理のすり替えを行っている。このすり替えは、「住み込み乳母」産業の裏面を暴き出すことによって強いインパクトを与え、高い乳児死亡率の原因を巧みにブルジョワ女性の授乳拒否に結びつけ、彼女たちの意識改革をめざすためのものであった。

このような告発を経た後、「住み込み乳母」の弊害がブルジョワ女性たちの耳に届くことになるのは、1901年のゾラの小説『多産』と、1901年のブリュウの戯曲および同名の小説『代理母』の発表の後である。19世紀末には、ブルジョワ女性は授乳をしないことが普通であったため、母による授乳を称賛する作家はほとんどいなかった[Rollet 2001 32]。しかしゾラは『多産』において、主人公の夫婦がブルジョワ社会の風習に反して多くの子どもを産み、自ら母乳を与え、育てることによって家族が繁栄していく様子を描く。ゾラは「彼女はコルセットの留め金をはずした。白い胸が出され、絹のようになめらかな乳が薔薇色の先端からあふれ出た。生命の花が生まれるつぼみのようであった」と、美しい形容詞をもちいて母乳を称揚する[Zola 1928 225]。ゾラにとって、子どもを持つことを拒否し、授乳を嫌うブルジョワ社会は、非難されるべきもの、人類の繁栄を阻害するものであった。一方「住み込み乳母」として働く女性たちに対しても、「乳母という職業を選択することは、自分たちを人間の等級以下に置くことです。これ以上胸をむかつかせる恥ずべき産業はありません。多くの場合それまで賢明であった娘たちが、雄牛のところに連れて行かれる雌牛のように、乳がでるようになるために男のところに行

く。職業乳母の目には、子どもはその職の前提として必要なもの、商売の道具でしかありません。(中略)最低のおろかな無知、卑劣な動物です」と非難の言葉をあびせている［Zola 1928 258］。

ブリュウの『代理母』は、自分の意志に反して「住みこみ乳母」になることを強いられた田舎の若妻が、どうしても子どもと夫が心配になり村に戻ってしまうが、結局、田舎の習慣に縛られていた夫と舅を説得し、若妻はめでたく家族とともに暮らすことになるというストーリーである。舞台は、見栄のために社交に明け暮れる都会のブルジョワ家族と、伝統的に「住み込み乳母」を輩出する村である。その村では、唯一の産業は乳母であり、男たちは乳母の給料をあてにするばかりで働かない。この話の山場となる場面では、田舎の医者がブルジョワ女性たちに「住み込み乳母」の実態を次のように語る。「『住み込み乳母』の子どもの死亡率は恐ろしいほど、つまり普通の3倍以上です。(中略)あちらでは、女が出産すると関心事はひとつしかありません。乳母になることです。できるだけ早く乳母になりたいのです。なぜならパリでは、出産から最も日が浅い乳母が最も求められるからです。家族は乳母の健康についてよく知るために、乳母の子どもを見たがります。(中略) 真夏でも、真冬でも、このかわいそうな子どもたちは3等車に乗せられます。嘆かわしく、痛ましい包みを持ってパリへの出発です。乳母斡旋所に到着します。(中略) ついに雇われます。すると、乳母手配師、他の乳母、近所の人がそのかわいそうな小さな子を、来たときと同じように暑い中あるいは寒い中を、同様の3等車で持ち帰ります。(中略) 母親の授乳は女性の兵役とみなされなければなりません。1870年より前、フランスの金持ちの男は代わりの男を金で買い、血を流す税を免れる権利を持っていました。もう『代理兵役 (Remplaçant)』は存在しません。『代理母(Remplaçante)』ももう存在してはなりません」［Brieux 1922 205-207］。このようにブリュウにあっては、授乳は男性の兵役に準じる国家への義務であり、乳母は「代理兵役」と同じく存在してはならないものであった。

以上のように、ブルジョワジーの贅沢誇示への非難から生じた「住み込み乳母」への批判は、社会の指導者たちによって、科学的根拠をまとわされ、人口減少と国力の低下に対する恐怖、さらには国家の危機にまで結び付けられた。このような批判に対して、「住み込み乳母」を雇う側のブルジョワ女性たちは、どのような反応を示したのであろうか。

第4節 「住み込み乳母」批判に対するブルジョワ女性たちの反応

19世紀末には、一般的に、ブルジョワ女性が自分の子どもに授乳することは「無駄な気まぐれ」「狂気の沙汰」と考えられており［Rollet 2001 33］、彼女たち自身が「住み込み乳母」を雇うことに何らかの疑問を抱くことはなかった。例えば19世紀末に発刊されていたモード誌『ラ・モード・イリュストレ』には、春になると当然のように、乳幼児の衣服とともに乳母の衣装が紹介されている［La Mode Illustrée e. g. 1893, 1894, 1895］。そのような状況にあったブルジョワ女性たちにとって、ブリュウの戯曲は衝撃であり、大きな反響を呼んだ。

婦人雑誌『フェミナ』には、上演後まもなく、この戯曲について次のような論評が掲載されている。「『代理母』――一般的な語である乳母の代わりに一時的に使われている語―は常に存在している。しかし最近アントワーヌ劇場において、すばらしい夜の公演が行われた戯曲をもとに、ブリュウ氏が執筆したばかりの感動的な小説を読むまで、その存在は忘れられていた。ブリュウ氏は、観客や読者に、ほろりとさせる感動や良心の呵責に加えて、人命を奪う報酬目当ての哺乳の濫用をできるだけ早くやめさせるための改革を行わなければならないという思いを呼び起こすために、戯曲と小説を書いた。(中略) これら社交界を過度に縛っている風習、娯楽と虚栄の複雑さ、洗練されたおしゃれが告発されている。では簡素で清潔な生活のあったはるか昔、吟遊詩人やキタラ奏者がパイドラとオデッセイアの情熱を詩っていた頃、何故ギリシャの母親たちにはすでに『代理母』がおり、ヘレネの赤ん坊には、我々同様、乳母がいたのか。(中略) 非難の的となっているパリジェンヌの軽薄さも、形をゆがめるコルセットも、5時のお茶も、絵画展の招待も、そして専横的な用事もなかった頃、(中略) 子どものユリシーズは乳母の歌で眠っていた」［*Femina* 1 nov. 1901］。つまりこの論評の執筆者は、乳母制度はブルジョワの奢侈や見得によって出現したものではなく、昔からの習慣であり、「乳母はまだ必要である」と考えている。しかしその一方で、「今日の『乳母』は街頭で見ることができる。仰々しい散歩用の衣装を着て、金色のピン

で帽子に留めたリボンを後ろに垂らし、威厳のあるふくらんだマントの上に大きなリボンを蛇のように舞い上がらせている。しかし乳母斡旋所で見かけるその女は、陰気な姿と不快なにおいをしており、ブリュウの劇の場面にあるような、つらい現実を感じさせる」と、ブリュウが指摘するとおりに、乳母とその子どもの裏の現実が存在することを認めている。そしてこの問題の解決のためには、「乳母が少なくなることが期待される」とする。しかし現実には、「冬が来て、貧しい母親とそのかわいそうな子どもたちの状況がいつものように悪化する時期、幸福な母親たちに対して、『母乳保育協会』の存在を思い出させ、女性の連帯を義務とさせましょう」と、乳母の子どもの悲惨な状況は慈善活動の延長である保育所設立によって解決しようと考えている［*Ibid*. 1901］。実際に、その後の『フェミナ』には、様々な保育施設が紹介され、慈善への協力が呼びかけられている［*Femina* e. g. 1903, 1905, 1906］。

では結局、ブルジョワ女性は「住み込み乳母」を利用しつづけたのだろうか。1904年5月15日付『フェミナ』には、フラン・ノアンの詩に添えて、様々な地域の衣装を着た乳母と赤ん坊の写真が掲載されている。見出しには「美しい乳母、良い赤ちゃん、乳母たちのバラード—太陽がではじめたので、乳母たちが再び午後の散歩をはじめた。大きな被り物やカラフルなリボンをつけた縁なし帽で華やかに彩られ、パリの公園、広場、通りを散歩する。彼女たちは、フランスのあらゆる地域の一部であり、あらゆる国の一部である。それぞれの出身地のピトレスクな衣装をパリで保つことが望まれている」と書かれている。ノアンの詩は「ブリュウ、ブリュウ、目を閉じよ、乳母を悲しませるあなたの目を」ではじまり、続いて、「鼓手長、奏楽始め！広場に、ベンチに、大きなリボンをつけた乳母たちがいる」「縁なし帽のリボンは、灰色の軍帽についているかのように、新兵を位置につかせるのが好き、乳母たちはいつも軍隊を持っていた」と、乳母を小さな子どもを率いる指揮官にたとえている。さらに「これらのリボンには、おそらく象徴的な意味がある。単なる小物ではなく、鎖のように引きずるリボン。それに愛着があると感じる」と書かれている［*Femina* 15 mai 1904］。フラン・ノアンはブリュウの「代理母」を強く意識し、華やかな外観の裏にある乳母たちの悲しみ、故郷への寂寞の情を感じている。しかし今はそれには目をつぶり、衣装の美しさを御覧なさいと言っているのである。

また1906年6月1日付では、「美しい乳母コンクール」という見出しで、様々な地方の衣装を着た「住み込み乳母」の写真が赤ん坊とセットになって掲載されている［*Femina* 1 juin 1906］。さらに第一次世界大戦前夜には、「召使のモード」という記事の最初に乳母と子守の衣装が取り上げられ、「現在の若いお母さんたちは、乳母がその出身地の衣装を保つのを好むように見える。（中略）パリにも大勢のブルターニュ女や、かなりの数のアンダルシア女が認められる」とある［*Femina* 15 mars 1912］。これらの記事から、「住み込み乳母」は存続しているが、その典型的な衣装は消滅したことがわかる。

もうひとつの変化は、乳母から子守への移行である。先に挙げた1912年3月15日付『フェミナ』には、「ベビーに対する現在の私たちの好みは、イギリス風子守（nurse anglaise）にあります。彼女たちは一般には離乳しているか、哺乳瓶で育てられている子どもの世話をしています。家の中では、白い制服を着ていることが最も多く、（中略）マントか二重マントが彼女たちの衣服です。後ろに薄いヴェールを垂らし、白い顎紐のついたシンプルな小さな帽子をかぶっています。糊の利いた白布の衿とカフスがドレスにつけられています」［*Femina* 15 mars 1912］と書かれている。さらに1913年1月1日付の記事でも、「授乳なし乳母（nourrice sèche）」と子守を比較して子守を勧めている［*Femina* 1 janv. 1913］。19世紀末から20世紀初頭にかけて、ブルジョワ社会における人々の好みは、豪華で華やかなものから簡素で清潔なものへと変化したが［松田 2002 77］、召使の衣装も同様の傾向にあった。白い衿とカフスのついた簡素なイギリス風子守の衣装は、このような流れにも適合していた。1914年5月15日付『フェミナ』には、「乳母に何を着せるか」「子守の服装」という見出しで、2頁にわたって、乳母の衣装を着た女性7人と子守の衣装を着た女性8人の写真とその説明が掲載されている［*Femina* 15 mai 1914］。つまり第一次世界大戦前夜には、乳母とイギリス人子守が半々ぐらいで支持されていたようである。

以上のように、20世紀初頭には、19世紀末に流行った長く幅広のリボンと大きなマントという典型的な衣装を着た「住み込み乳母」は消滅し、地方色豊かな衣装を着た乳母か、白い衿とカフスのついた簡素な衣装を着たイギリス風子守に変わっていった。

1913年10月15日付『フェミナ』にフラン・ノアン夫人であるマリー・マドレーヌによる「お母さんの一日」という記事が掲載されている。そこには授乳している優しい母親の挿絵とともに、母親による授乳の賞賛と勧めが書かれている。それにもかかわらず、「奥様、ご存知のように、乳母の役をすることは、あなたを永久に束縛するものでは全くありません。しばらくしたら、滅菌乳の『助けを借りる』ことを妨げるものはなにもないのですから。(中略) それに、あなたが滅菌乳に『助けられている』ことを全ての人に打ち明けねばならないわけではないので、煩わしい訪問を少なくしたり、やめてしまうための、すばらしくて貴重なアリバイを持つことになるでしょう」と滅菌乳の使用も勧めてもいる。ここには、もはや哺乳瓶に対する嫌悪感はみられない。

続いて次のページには、母親と子どもを抱く乳母がいっしょに散歩している挿絵つきで、「奥様、もちろんあなたがいつも赤ん坊を連れているわけではありません。しかし、赤ん坊がどこにいるのかきちんと知っておきなさい。また買い物や訪問のときに、時々は『奥様が通りかかるかもしれない』と知らせておいて、少し回り道することを忘れてはいけません」と述べている［*Femina* 15 oct. 1913］。この挿絵にある若い母親の姿が、この時代のブルジョワ層の理想である。実際には召使が赤ん坊の世話をし、哺乳瓶を利用していたとしても、少しの間だけは母乳を与え、「母乳で育てている」と公言できること、子どもの世話をしているというポーズを示すことが重要となった。つまり、社会に範を示すべきブルジョワ女性であるためには、母乳を与え、子どもの世話をする母親になる必要が生じたのである。しかし一方で裕福であることを示すには、赤ん坊を抱く召使の女性の存在もやはりまだ必要であった。この絵に描かれた女性は、服装からみれば「住み込み乳母」ではあるが、もはや自分の乳を与えることを前提としてはいない。結局、自分の乳を与えるという乳母本来の役割をしていないとしても、赤ん坊の世話をする召使の女性は、「乳母」あるいは「子守」という呼び名で存続しつづけたといえるであろう。

おわりに

19世紀の最後の10年間に「住み込み乳母」が急増した。これは次のような社会の流れの中に位置づけられるであろう。すなわち19世紀後半、急速な工業化による新興のブルジョワジーが多数出現した。しかし何をもってブルジョワジーとなるかはあいまいであったため、人々はブルジョワらしい外観―住居の豪華さ、社交習慣、召使の存在等―を持つことで、自分がブルジョワであることを示そうとした。そのためには日常生活では質素倹約していても、いかにも豊かであるかのように見せかけることに心を配っていた。

なかでも社交は最も重要と考えられていたので、母親が授乳で社交生活を中断することは避けなければならなかった。また子どもを危険にさらす恐れのある「持ち帰り乳母」に子どもを託すことや哺乳瓶の利用はためらわれた。ブルジョワ女性たちは「住み込み乳母」を雇うことが最上と考えていたのである。

しかし「住み込み乳母」増加の最大の要因は、「住み込み乳母」の存在自体がブルジョワ階級への帰属を示すものになっていたことにあるだろう。もともと「住み込み乳母」を利用していたのは上流階層であり、育児のマニュアル本をみると、「住み込み乳母」を雇うことは、裕福なブルジョワの主婦である証に思えた。乳児をつれて公共の場を散歩する「住み込み乳母」はステータス誇示の恰好の展示物となった。その結果、貧しい階層のブルジョワたちまでもが「住み込み乳母」を雇うようになっていったのである。

一方「住み込み乳母」を提供する側である貧しい村では、他に産業がないので、生活のために乳母にならざるを得ない状況があった。そのような村では、伝統的に乳母を輩出しており、出産を終えた女性が「住み込み乳母」となって利益を得るのは当然のことになっていた。彼女たちにとって「住み込み乳母」とは、衣食住を得るだけでなく、召使の中でも特権的な立場で都会生活を満喫できる職である。このような状況下で、19世紀をとおして「住み込み乳母」の供給は需要をうわまわっていた［Faÿ-Sallois 1996 54］。

乳母の衰退についてファイ＝サロワは、斡旋所に登録した乳母のうち就職先をみつけることのできなかった割合が、1889年から1898年には15%であったのが、1905年には22%になっていることから、乳母減少の原因は供給より需要にあるとしている［Faÿ-Sallois 1996 94］。すなわち、「住み込み乳母」衰退の主要な原因は、乳母のなり手が急減したからではなく、ブルジョワ側の需要の少なくなったことにあると推察できる。

結局「住み込み乳母」の消滅は、20世紀に入り、

「住み込み乳母」が階層への帰属の標識としての役割を果たさなくなったことにある。同様にこの時期には社交の役割も衰退していく。代わってブルジョワジーの象徴として登場するのが、母乳を与え、子どもの世話をする母親である。フラン・ノアン夫人の文に見られるように、母親による授乳が社交をやめる口実に使われさえしたことは、社交の衰退と母乳育児が相互に連関していたことの証であろう。実際には子どもの世話をする召使は存続しつづけたのではあるが、必ずしも「住み込み乳母」である必要はなく、通いの子守や「授乳なし乳母」に変化していった。

〈参考文献〉

史料

Achard, Amédée, 1999 (orig. 1840-1842)《La nourrice sur place》, *Les Français peints par eux-mêmes: encyclopédie morale du dix-neuvième siècle*, T. 1, Hon-no-tomosha (reprint,orig.Curmer)

Brieux, Eugène, 1922 (orig. 1901) *Les Remplaçantes: L'Engrenage: Maternitè, Théatre complet de Brieux* t. 4, Libr. Stock

Daudet, Alphonse, 1930 (orig. 1877) *Le Nabab: mœurs parisiennes*, Libr. de France (河合亨訳 1949『ナバブ上』世界文学社)

1901-1914 *Femina,* Lafitte

Larousse, Pierre, 1866, *Grand dictionnaire universel du XIXe siècle,* X, Administration du Grand dictionnaire universel

Ledé, Fernand (Dr), mars 1891《Les Enfants de Paris en nourrice》, Extrait de *l'Assistance, Bulletin officiel de la Policlinique de Paris*, publications de la Policlinique de Paris

Millet-Robinet, Cora et Allix, Émile, 1884 *Les livres des jeunes mères: la nourrice et le nourrisson,* Libraire Agricole de la Maison Rustique

1862-1904 *La Mode Illustrée,* Firmin Didot

Perier, B. E., 1886 *Guide des mères et des nourrices,* J. B. Baillière

Petit, E. P. Léon (Dr), 1893《Histoire d'une nourrice sur lieu; conférence faite au Palais des Sociétés Savantes, sous les auspices de la Société d'Allaitement maternel, le 15 novembre 1892》, *Bulletin*, nº18, Société nationale des conférences populaires

Zola, Émile, 1928 (orig. 1901) *Fécondité, Les Oeuvres complètes Émile Zola; Les quatre évangiles,* F. Bernouard

研究書

Ariès, Philippe, 1971 *Histoire des populations françaises*, Seuil

Cova, Anne, 1997 *Maternité et droit des femmes en France (XIXe-XXe siècles)*, Anthropos

Delporte, Christian, Janvier/Mars 1998《Presse et culture de masse en France (1880-1914)》, *Revue Historique*, 605

Faÿ-Sallois, Fanny, 1996 *Les nourrices à Paris au XIXe siècle*, Histoire Payot

Martin-Fugier, Anne, 1978《La fin des nourrices》, *Le Mouvement social*, nº105 oct.-déc., Institut français d'histoire sociale

Pange, Comtesse Jean de, 1962 *Comment j'ai vu 1900,* Grasset

Perrot, Marguerite, 1961 *Le Mode de vie des familles bourgeoises 1873-1953*, A. Colin

Perot, Philippe, 1981 *Les Dessus et les dessous de la bourgeoisie: Une histoire du vêtement au XIXe siècle,* Librairie Anthème Fayard (大矢タカヤス訳 1985『衣服のアルケオロジー　服装からみた19世紀フランス社会の差異構造』文化出版局)

Rollet, Catherine, 1990 *La politique à l'égard de la petite enfance sous la IIIe République*, Institut national d'études démographiques: Presses universitaires de France

——— 2001 *Les Enfants au XIXe Siècle,* Hachette

Sussman, George D., 1980 "The End of The Wet-Nursing Business in France,1874-1914" In Wheaton, R. & Herevwen, T. K. (eds.) *Family & Sexuality in French History*, University of Pennsylvania Press, pp.224-252

——— 1982 *Selling Mothers' Milk: The Wet-Nursing Business in France 1715-1914,* University of Illinois Press

松田祐子　2002「フランス第三共和政前半ブルジョワ社会における『主婦』の誕生」『西洋史学』207，pp.64-78

（まつだ・ゆうこ　大阪大学大学院文学研究科　博士後期課程3年）